

第 59 回シェイクスピア学会

セミナー2：初期近代イングランドをクィアに読む・観る・考える

本セミナーは、昨年の学会延期決定直後から発表当日まで、一年半にわたり全 14 回、オンラインにてクィア勉強会を開き、文献を読み、活発な議論をおこなって準備をしてきた。クィア理論が、性的アイデンティティに端を発しながら、異性／同性愛という二元論的権力構造自体を脱構築し、セクシュアリティの枠を超えて様々な分野に及ぶとき、欲望のあり方を他の制度と連動させることで新たな視座を獲得できると考えた。各々が作品の読みと連動させた制度や規範は、「出産」、「知識」、「教育」、「家父長制度」、「異性愛制度」、「財産相続」である。以下、発表順に要旨をまとめた。



木村明日香はミドルトンの喜劇 *More Dissemblers Besides Women* に登場するラクタンシオと小姓（ページ）に注目し、クィアな欲望と再生産について論じた。ページは男装した女性で、二人は大団円で結婚し子供も授かるが、一見規範的な異性愛には複数のクィアな契機＝瞬間がみられる。注目したのは次の三点である。一）セックスとジェンダーを規定するはずの言語や衣服がそれらを攪乱し、新たな意味づけの可能性に開かれた身体が想像される点。二）セックスとジェンダーが流動的なラクタンシオとページにおいて異性愛とも同性愛とも名付けられないクィアな欲望が発動する点。三）当時の演劇で唯一妊娠・出産する小姓の表象が、昨今のトランス男性の妊娠・出産と響き合い、「女性の」出産という言説に疑問を投げかける点。まずラクタンシオとページのジェンダー／セックス／セクシュアリティの流動性を Stockton (2010) のクィアな子供理論

を援用して論じた後、ミドルトンが性別の曖昧な肌着 (shirt/smock) のイメージリーを通じて、二人の性交渉をさまざまな性愛を横断するものとして表象していることを指摘した。また二人の「息子」のセックスとジェンダーも流動的であり、クィアな実践を継承する再生産が想像されていると主張した。

杉浦裕子はトマス・ミドルトンの『『チープサイドの貞淑な乙女』(1613) にみる生徒と教師のクィアなモーメント』と題し、大学生 Tim と Tim の tutor に着目した。まずバトラーの『問題=物質となる身体』を援用しながら、Tim の言語感覚と身体性に家父長制規範と異性愛規範を揺るがす契機/瞬間があることを確認し、次にそのクィアなモーメント発現の源を、Tim が受けた教育に見出す試みをした。

大学のチューター制度からは学生とチューターのある程度密接な関係が浮かび上がる。縁談目的の Tim の帰省に tutor が付いてきていつも一緒にいること、実家でも二人きりの課外授業を繰り返していることなどから、Tim の結婚生活にはもれなく tutor がついてくる可能性を示した。次に生徒と教師のクィアな欲望の種をグラマー・スクールにおける鞭打ちの慣習に遡って考察した。理想的な男性を育てる教育目的とは裏腹に、鞭打ちは生徒とのお尻を女性化するという矛盾を抱えていたからである。

最後に、学校と劇場という二つの制度の類似性、本作を上演した劇団の事情、そして少年俳優たちが集う場面で Tim の鞭打ち体験が披露されるという事実などから、グラマー・スクールの生徒、大学生、チューターの関係性が当時の少年俳優・若手俳優の関係性と重なることも示唆した。

高根広大は、『『じゃじゃ馬馴らし』におけるクィアな対話の力』において、初期近代イングランドの教育で想定されたジェンダー・ロールと、その教育実践にクィア性が見られることに注目し、『じゃじゃ馬馴らし』におけるキャタリーナの教育について論じた。男性教育と女性教育の目標を同時に表象するキャタリーナの教育は、クィアな欲望を表象するものとして舞台上で演じられ、それ自体がさらに観客を教育し、パフォーマンスにクィアな場を形成していく。キャタリーナやビアンカに対する対話形式の教育は共に、男性に対する学校教育や、女性に対するオウィディウスの教を同時に想起させるものである。そこには、模倣と反復、創造、さらには逸脱に対する罰則という教育実践が、学校や家庭、舞台という様々な場所でクィアに行われる様子が表象されている。キャタリーナの最後のスピーチは、その教育の結果であり、同時に新たな教育実践でもある。『じゃじゃ馬馴らし』という作品が暴き出し、私たちに教えてくれるのは、教育によって強固に二分化されたように見える初期近代イングランドのジェンダー規範には、実はクィアな曖昧さが含まれているということであり、それを形成する対話には、クィアな瞬間の発現が見られるということである。

神山さふみは『空騒ぎ』とはどんな騒ぎか——家父長制とベッドフェローのクィアな関係』を発表した。『空騒ぎ』におけるベッドフェローのビアトリスとヒアローの同性愛的関係は、先行研究で指摘されている。そこで本発表では家父長制と女同士のベッドフェローの関係に注目した。初期近代イングランドでは、女同士の同衾は「純潔」という言説の枠内で機能し、家父長制を強化しようとする慣習であると同時に、ベッドフェローの存在は家父長制の規範がそれほど強固ではないことを示す、という両義性があった。

「クィア」とは、ここでは異性愛ヘゲモニーの「安定性と可変性の地位を問いただす呼びかけ」という Judith Butler の定義に依拠した。『空騒ぎ』の中で、女同士の同性愛的欲望が家父長制の再生産のシステムをパフォーマンスタイプに揺さぶる時、家父長制は異性愛規範と純潔規範の中にそのクィア性を封じ込め、自らの境界を規制する。すると逆説的に、女同士の同性愛的欲望が喚起され、ベッドフェローのクィア性が表出し、家父長制の規範を内側から解体してゆく、という家父長制とベッドフェローのクィアな関係を検証した。かくて *Much Ado About Nothing* の「騒ぎ (Ado)」とは、「家父長制 (Nothing)」という空虚な実体に孕まれる女同士の絆の力であり「クィア性 (Ado)」なのだ、ということを指摘した。

坂本晃平は「What You Will のクィアな語りたち：大団円の再読を目指して」と言うタイトルで『十二夜』に関する報告を行なった。当該発表では、まず、1幕5場と2幕4場におけるヴァイオラからオリヴィアとオーシーノに対してそれぞれ行われる語りについて、両者がともに will を鍵概念としており、作中において重要な位置にあることに注目した。ジュディス・バトラーの議論も参照しつつ行われた検討の結果、第一に、これらのヴァイオラによる発話は、彼女の意志＝欲望が、彼女自身の男性でもあり女性でもあるクィアな身体性を通して前景化するパフォーマンス的な言語行為であるということ、第二に、彼女の言語行為は多様な身体の可能性を排除して二元論的なセックスと異性愛規範とを要求する家父長制の言説に対するクィアな論駁であるということ、が提起された。次に、以上のヴァイオラによる語りがオリヴィアとオーシーノの欲望を喚起しプロットを推進していることを確認した上で、5幕1場の大団円において、セバスチャンが二組の結婚から疎外されてゆく様子を検討し、オリヴィアの彼との結婚はその妹ヴァイオラとの交通を維持する目的のクィアなものであったとする可能性を提示した。

最後に松尾江津子が『お気に召すまま』におけるクィアな相続——モンストラスな娘たちの楽園』を発表した。本論のクィアな点は、まず 1) 女同士の結婚・財産相続を口にしたシーリアの台詞が、同性間の欲望という意味でクィア(定義①)だけでなく、この言葉を契機に、彼女達の性愛が家父長制にとって「脅威でないもの」から「脅威」へ

と転ずる価値転換の要となるという意味でクィア(定義②)である点だ。「クィア(変態)」(定義①)という侮蔑の呼びかけを、繰り返される反覆の中から意味をずらし肯定的に書き換えたように、その価値転換の論理構造までを含んで「クィア」の定義(②)とする時、クィアは様々な面で起こる。この意味転換作用を 2)象徴界で試みたのがジュディス・バトラーであり、この劇ではシーリアが法の自己転覆の裂け目を開き、ロザリンドが法の書き換えをおこなう。3) ロザリンドが主体構築の面でこれをおこなえば、4)儀式の面では、劇後半繰り返される(疑似)結婚式、5)制度の面では、相続制度で反復とずらしが起こる。そして女同士のクィアな相続は、リリーからロッジを経てこの劇へと受け継がれる間テクスト的な文学的遺産であり、家父長制の根幹を支える相続制度が、同性同士の遺産相続を内部に抱え込むクィアな系譜を持つことを確認し、この劇が幾重にもクィアを構造化した劇だと論じた。

その後、コメンテーターの本橋哲也が「**From Queer to Queering 言説の壁を壊し、言葉の橋を架ける**」と題したコメントにおいて、ミシェル・フーコー、ジュディス・バトラー、竹村和子が「クィア批評」について述べた文章を抜粋し、文脈の整理を試みながら、以下の諸点を提起した。

- 1) 言語にはパフォーマティブな力が潜在しているが、それはつねに言説規範による監視統制と、詩的言葉による逸脱解放とのあいだのせめぎ合いの中にある。
- 2) クィアとは「名詞＝名士」に縛られた形容詞ではなく＜動詞＝同志＞である。
- 3) 演劇の中にはクィアな契機が潜んでおり、それを探るのが批評である。
- 4) クィアを「異形の怪物的(monstrous)身体」と翻訳すれば、それがルネサンス期や江戸後期の芸術のような特殊性に支えられているがゆえに、普遍性を帯びた概念にして実体であることが理解できる。
- 5) クィアをベンヤミンが「歴史の概念について」の中で言う「非常事態という通常の状態」として捉え返せば、自ら歴史を語る言語を持ちえなかった者たちに応え得る「歴史」の要請という課題に、クィアは身体や欲望を介して批判的に貢献しうる。

一年半の勉強会で共に学んできたメンバー諸氏に改めて感謝し、学会運営の先生方、聴衆の皆様に感謝したい。